

三鷹市美術ギャラリー 収蔵作品展 II

前期：2021年12月4日(土) ～ 2022年1月16日(日)

会場：三鷹市美術ギャラリー

主催：三鷹市美術ギャラリー・（公財）三鷹市スポーツと文化財団

出品リスト

作品 番号	作家名	作品名	イメージ寸法 (縦×横)	制作年	技法／材質	エディ ション	備考
1	赤瀬川原平	風のレコード大盤 (トマソン黙示録シリーズ)	728×1030mm	1988年	オフセットリトグラフ／ 紙	8/8	
2	赤瀬川原平	植物的無意識が含むπの採集 (トマソン黙示録シリーズ)	728×1030mm	1988年	オフセットリトグラフ／ 紙	8/8	
3	赤瀬川原平	公務のドローイング採集 (トマソン黙示録シリーズ)	728×1030mm	1988年	オフセットリトグラフ／ 紙	8/8	
4	赤瀬川原平	路上の日蝕観測 (トマソン黙示録シリーズ)	728×1030mm	1988年	オフセットリトグラフ／ 紙	8/8	
参考	赤瀬川原平著書： 『オブジェを持った無産者』1970年5月・復刊2015年1月、『鏡の町皮膚の町』1976年11月、『父が消えた』(尾辻克彦)1981年3月、 『東京路上探検記』(共著：尾辻克彦)1986年7月、『ライカ同盟NAGOYA大写真！』(共著：秋山祐徳太子、高梨豊)1996年6月、 『老人力』1998年9月、『中古カメラ あれも欲しい これも欲しい』1999年2月、『路上の神々』2002年11月、『赤瀬川原平の日本美術 観察隊 其の1』2003年4月、『ボケかた上手』(共著：東海林さだお)2003年7月、『戦後腹べこ時代のシャッター音ー岩波写真文庫 再発見』2007年9月、『東京随筆』2011年3月						
5	荒木十畝	達磨	1250×600mm	1925年	墨／紙		
6	池田龍雄	鷹の血	345×500mm	1996年	シルクスクリーン／紙	130 /150	森秀貴・京子 コレクション
7	池田満寿夫	女と鳥	257×216mm	1961年	ドライポイント、エッチ ング／紙	E.A.	
8	池田満寿夫	アダムとイブ	285×242mm	1962年	ドライポイント、エッチ ング／紙	E.A.	
9	池田満寿夫	宗達の森 (ジャパネスク・ランドスケープ)	600×500mm	1986年	リトグラフ／紙	38/50	
10	池田満寿夫	光琳の庭 (ジャパネスク・ランドスケープ)	600×500mm	1986年	リトグラフ／紙	38/50	
11	池田満寿夫	マチスの窓 (ジャパネスク・ランドスケープ)	600×500mm	1986年	リトグラフ／紙	38/50	
12	池田満寿夫	大きな湖の前の家 (ジャパネスク・ランドスケープ)	600×500mm	1986年	リトグラフ／紙	38/50	
13	池田満寿夫	光る海 (ジャパネスク・ランドスケープ)	600×500mm	1986年	リトグラフ／紙	38/50	
14	池田満寿夫	黒い太陽 (ジャパネスク・ランドスケープ)	600×500mm	1986年	リトグラフ／紙	38/50	
15	池田良二	不在の気配 (扉)	170×250mm	1996年	フォトエッチング、アク アチント、ドライポイン ト、メゾチント／紙	8/25	
16	池田良二	不在の気配 (1)	170×250mm	1996年	フォトエッチング、アク アチント、ドライポイン ト、メゾチント／紙	8/25	
17	池田良二	不在の気配 (2)	170×250mm	1996年	フォトエッチング、アク アチント、ドライポイン ト、メゾチント／紙	8/25	
18	池田良二	不在の気配 (3)	170×250mm	1996年	フォトエッチング、アク アチント、ドライポイン ト、メゾチント／紙	8/25	
19	池田良二	不在の気配 (4)	170×250mm	1996年	フォトエッチング、アク アチント、ドライポイン ト、メゾチント／紙	8/25	
20	池田良二	不在の気配 (5)	170×250mm	1996年	フォトエッチング、アク アチント、ドライポイン ト、メゾチント／紙	8/25	
21	池田良二	不在の気配 (6)	170×250mm	1996年	フォトエッチング、アク アチント、ドライポイン ト、メゾチント／紙	8/25	
22	池田良二	不在の気配 (7)	170×250mm	1996年	フォトエッチング、アク アチント、ドライポイン ト、メゾチント／紙	8/25	

作品番号	作家名	作品名	イメージ寸法 (縦×横)	制作年	技法／材質	エディション	備考
23	一原有徳	(無題)	338×279mm	1958年	石版モノタイプ／紙	1/1	
24	一原有徳	標識板 1 0	450×300mm	1981年、 1987年	トタン版（ホロー板を 凹版プレス）／紙	E.P.	
25	一原有徳	S Y N	425×300mm	1989年	アルミニウム版モノタイプ／紙	1/1	
26	上前智祐	(無題)	360×255mm	1981年	リトグラフ／紙	15/38	1981.1
27	上前智祐	(無題)	145×210mm	1981年	リトグラフ／紙	6/20	1981.4.24
28	上前智祐	(無題)	190×270mm	1981年	リトグラフ／紙	11/30	1981.4.24
29	上前智祐	(無題)	230×355mm	1981年	リトグラフ／紙	9/20	1981.5.2
30	上前智祐	(無題)	245×350mm	1981年	リトグラフ／紙	10/20	1981.6.20
31	上前智祐	(無題)	505×340mm	1982年	リトグラフ／紙	2/13	1982.2.4 113
32	上前智祐	(無題)	350×250mm	1982年	リトグラフ／紙	10/20	1982.2.24 117
33	上前智祐	(無題)	250×280mm	1982年	リトグラフ／紙	9/20	1982.2.24 120
34	上前智祐	(無題)	350×245mm	1982年	リトグラフ／紙	14/23	1982.2.24 126
35	上前智祐	(無題)	515×720mm	2000年	オフセット／紙	15/20	2000.4.5
36	上前智祐	(無題)	490×700mm	2000年	オフセット／紙	4/27	2000.4.24
37	上前智祐	(無題)	690×475mm	2000年	シルクスクリーン／紙	15/30	2000.4.24
38	上前智祐	(無題)	695×485mm	2000年	シルクスクリーン／紙	21/30	2000.4.24
39	上前智祐	(無題)	695×485mm	2000年	シルクスクリーン／紙	22/30	2000.4.24
40	上前智祐	(無題)	700×480mm	2000年	シルクスクリーン／紙	16/29	2000.4.24
41	上前智祐	(無題)	480×700mm	2000年	シルクスクリーン／紙	2/12	2000.9.8
42	上前智祐	(無題)	435×290mm	2001年	エッチング／紙	9/15	2001.6.27
43	上前智祐	(無題)	600×410mm	2001年	エッチング／紙	14/15	2001.10.1
44	上前智祐	(無題)	330×450mm	2004年	シルクスクリーン／紙	1/19	2004.10.16
45	上前智祐	(無題)	315×470mm	2005年	シルクスクリーン／紙	3/20	2005.1.20
46	上前智祐	(無題)	315×470mm	2005年	シルクスクリーン／紙	2/22	2005.5.24
47	上前智祐	(無題)	460×315mm	2005年	シルクスクリーン／紙	2/21	2005.9.6
48	上前智祐	(無題)	135×175mm	2005年	シルクスクリーン／紙	21/24	2005.11.14
49	上前智祐	(無題)	240×330mm	2005年	シルクスクリーン／紙	3/22	2005.12.19
50	上前智祐	(無題)	350×230mm	2005年	シルクスクリーン／紙	3/20	2005.12.30
51	上前智祐	(無題)	290×249mm	2009年	エッチング／紙	3/8	2009.6.28
52	上前智祐	(無題)	347×276mm	2009年	エッチング／紙	2/6	2009.11.21
53	上前智祐	(無題)	247×167mm	2010年	エッチング／紙	3/9	2010.6.12
54	上前智祐	(無題)	416×355mm	2012年	エッチング／紙	2/4	2012.11.7
55	上前智祐	(無題)	177×123mm	2012年	エッチング／紙	1/5	2012.12.18
56	上前智祐	(無題)	227×162mm	2013年	エッチング／紙	1/5	2013.5.12
57	宇佐美圭司	還元	920×1250mm	1963年	油彩／カンヴァス		
58	宇佐美圭司	レイチェル	1850×1350mm	1965年	油彩／カンヴァス		
59	宇佐美圭司	連帯	1160×910mm	1968年	油彩／カンヴァス		
60	宇佐美圭司	Profile pf-1	745×553mm	1973- 1974年	シルクスクリーン／紙	12/50	
61	宇佐美圭司	Profile pf-2	745×553mm	1973- 1974年	シルクスクリーン／紙	12/50	
62	宇佐美圭司	Profile pf-3	745×553mm	1973- 1974年	シルクスクリーン／紙	12/50	
63	宇佐美圭司	Profile pf-4	745×553mm	1973- 1974年	シルクスクリーン／紙	12/50	
64	宇佐美圭司	Profile pf-5	745×553mm	1973- 1974年	シルクスクリーン／紙	12/50	
65	宇佐美圭司	Profile pf-6	745×553mm	1973- 1974年	シルクスクリーン／紙	12/50	
66	宇佐美圭司	Profile pf-7	745×553mm	1973- 1974年	シルクスクリーン／紙	12/50	
67	宇佐美圭司	切断の内側に空が	1940×1300mm	1987年	油彩／カンヴァス		
68	宇佐美圭司	ドローイング：円形劇場・底抜け	745×1060mm	2001年	水彩、顔料インク／紙		
69	宇佐美圭司	ドローイング：カルデラ	745×1060mm	2001年	水彩、顔料インク／紙		
70	宇佐美圭司	ドローイング：山々は難破した船に似て	870×1320mm	2001年	水彩、顔料インク／紙		

作品番号	作家名	作品名	イメージ寸法 (縦×横)	制作年	技法／材質	エディ ション	備考
71	宇留河泰呂	No.1	727×1030mm	不明	油彩／ベニヤパネル		
72	宇留河泰呂	No.5	655×457mm	不明	油彩／カンヴァス		
73	宇留河泰呂	No.6	456×380mm	不明	油彩／カンヴァス		
74	宇留河泰呂	No.7	530×450mm	不明	油彩／カンヴァス		細い赤い花
75	宇留河泰呂	No.12	455×530mm	不明	油彩／カンヴァス		
76	宇留河泰呂	No.13	905×630mm	不明	油彩／ベニヤ板		
77	宇留河泰呂	No.15	652×500mm	不明	油彩／カンヴァス		
78	宇留河泰呂	No.23	727×606mm	不明	油彩／カンヴァス		
79	宇留河泰呂	No.1	310×400mm	不明	ガラス絵		
80	宇留河泰呂	No.4	400×310mm	不明	ガラス絵		
81	宇留河泰呂	No.6	340×260mm	不明	ガラス絵		
82	宇留河泰呂	No.11	400×310mm	不明	ガラス絵		

作家解説

赤瀬川原平 AKASEGAWA Genpei

1937（昭和12）-2014（平成26）年 本名：赤瀬川 克彦

神奈川県横浜市に生まれる。1957年武蔵野美術学校（現・武蔵野美術大学）油絵学科中退。1958年「第10回読売アンデパンダン展」出品以降同展に出品、1960年ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズの結成に参加し、翌年にサトウ画廊で初めての個展を開催する。1963年に高松次郎、中西夏之らとともにハイレッド・センターを結成、「反芸術」「直接行動」を唱える路上パフォーマンスなどをおこなう。1965年から1970年の間に争われた「千円札裁判」では有罪判決となる。その後、宮武外骨に触発されジャーナリズムの場に活動範囲を広げていき、80年代からは「超芸術トマソン」の探求を行い、路上観察学ブームを起こす。尾辻克彦のペンネームで執筆した『父が消えた』が1981年芥川賞を受賞する。1995年名古屋市美術館「赤瀬川原平の冒険－脳内リゾート開発大作戦」、2014年町田市民文学館ことばらんど「尾辻克彦×赤瀬川原平 文学と美術の多面体展」、千葉市美術館「赤瀬川原平の芸術原論展 1960年代から現在まで」が開催される。2014年、死去。享年77歳。

荒木十畝 ARAKI Jippo

1872（明治5）-1944（昭和19）年 本名：朝長 悌二郎

長崎県東彼杵（ひがしそのぎ）郡大村久原郷（現・長崎県大村市）に生まれる。旧制大村中学校を退学し、1892年に荒木寛畝の営む寛畝塾へと入門する。翌年の日本美術協会展に出品した《朝顔と雉》が第3等褒状を得る。明治維新後、日本社会が急激な近代化を遂げる中で、日本画壇では近代化への反動として自国の絵画の在り方を問う機運がおこり、伝統的な日本絵画を追求しようとする「旧派」と日本画の革新を目指す「新派」が対立を深めていた。そのような中で、十畝は寛畝らと共に伝統的日本絵画を追求する日本美術協会に所属し、のちに帝国美術院の会員となる。師であった寛畝の逝去後から次第に十畝の作品には変化が生まれ、狩野派的な装飾表現を加えたものや、朦朧体を思わせる表現を用いた幽玄さを漂わせる作品が生まれる。さらに戦前・戦中に国内で巻き上がるナショナリズムの影響下では猛禽類の描かれた勇壮な花鳥画などを描くようになる。1944年、死去。享年73歳。

池田龍雄 IKEDA Tatsuo

1928（昭和3）-2020（令和2）年

佐賀県西松浦郡（現・伊万里市二里町）に生まれる。海軍飛行予科練習生となり特攻隊員として17歳で敗戦を迎える。除隊後佐賀師範学校を経て1948年多摩造形芸術専門学校（現・多摩美術大学）入学。岡本太郎、花田清輝、安部公房らの芸術運動に参加し、前衛に傾倒する。1954年の「第6回読売アンデパンダン展」では、海外におけるリアリズムの可能性を追求しルポルタージュ的意識のもとに描いた《綱元》を発表。このような問題意識は写真や映画、演劇への関心にも向かう。この後、松澤宥の概念芸術に共鳴して、抽象性観念性の高い作品へと展開していく。2018年、練馬区立美術館で大規模回顧展「戦後美術の現在形 池田龍雄展－楕円幻想」を開催。2020年、死去。享年92歳。

池田満寿夫 IKEDA Masuo

1934（昭和9）-1997（平成9）年

中国（旧・満州国奉天市）に生まれる。1945年終戦とともに郷里の長野に移り、少年時代を過ごす。1955年髪嘔らとグループ実在者を結成し、その後に瑛九が主宰するデモクラート美術家協会会員となる。瑛九のすすめにより始めた色彩銅版画によって1957年「第1回東京国際版画ビエンナーレ公募部門」に入選を果たす。1960年「第2回東京国際版画ビエンナーレ」では《女・動物たち》が文部大臣賞を受賞する。1965年にはニューヨーク近代美術館にて日本人初の個展「Prints of MASUO IKEDA」開催。さらに1966年「第33回ヴェネチア・ビエンナーレ版画部門」において大賞を受賞するなど国際的な評価を受け、制作拠点を海外に移す。帰国後は日本画を思わせる平面的な作品のほかコンピューターグラフィックスによる版画やブロンズ制作にも取り組む。小説家として1977年『エーゲ海に捧ぐ』で芥川賞を受賞。晩年はテレビ出演などメディアでの活動もみられ、活動は広がりを持ち続ける。1997年、死去。享年63歳。

池田良二 IKEDA Ryoji

1947（昭和22）年-

北海道根室市に生まれる。1965年武蔵野美術大学に入学して油彩を学んだ後、1975年ごろから独学で銅版画の制作を始める。後にアクアチントやフォトエッチングなどの手法も取り入れ、自身の版画の表現領域を拡大していく。70年代にはタピエスへのオマージュ作品である「à/avec Antoni Tàpies」シリーズを制作。1981年より文化庁派遣芸術家在外研修員として1年間ロンドンを中心に滞在し、帰国後は国内外の展覧会で多くの賞を受賞するなど国際的な活躍をみせる。故郷の旧落石無線送信局（北海道根室市）をモチーフとした作品を現在に至るまで作り続けている。1994年以降、アルバータ大学客員教授としてカナダに滞在中は、アメリカやカナダを中心として活動する。1990年「第7回ソウル国際版画ビエンナーレ」で大賞を受賞。国内では、2003年タカシマヤ美術賞、2005年山口源大賞を受賞、2009年紫綬褒章を受章。2017年まで武蔵野美術大学版画専攻教授を務める。

一原有徳 ICHIHARA Arinori

1910（明治43）-2010（平成22）年

徳島県那賀郡平島村（現・阿南市那賀川町）に生まれる。幼少期に移住した小樽市にて生涯を過ごす。1927年通信省小樽貯金支局へ入局し、定年まで働きながら制作活動を行う。1951年「第5回小樽市美術展」に入選。1950年代後半からモノタイプの版画の制作を開始する。1959年「第27回日本版画協会展」にて初入選した《轉》がアメリカのコレクターに買い上げられる。このことが、当時の神奈川県立近代美術館副館長土方定一の目に留まり、1960年同館主催の「現代日本の版画展」（メキシコ・イタリア・オーストリアを巡回）に9作品が出展。同年、朝日選抜秀作展への出品、東京画廊での個展開催。その後、モノタイプと金属凹版を利用した実験的な表現を追求し、金属を焼き付けた「Branding」シリーズや、ステンレスの鏡面をゆがませた「SUM」シリーズを発表する。2010年、死去。享年100歳。2011年市立小樽美術館一原有徳記念ホールにて「終わりなき版への挑戦 没後一年 一原有徳 大版モノタイプ」が開催される。

上前智祐 UEMAE Chiyu

1920（大正9）-2018（平成30）年

京都府中郡奥大野村（現・京丹後市大宮町）に生まれる。尋常小学校卒業と同時に京染め洗張り店への丁稚奉公に出たときの経験が、後の「縫い」の作品の源泉となる。1947年「第1回二紀展覧会」で《舞鶴港の夕景》が入選。1951年には初めての個展を開催。1954年吉原治良を中心とした具体美術協会の結成に参加し、解散まで出品を続ける。1966年には第2回ローザンヌ国際展で作品が買い上げられる。1950-60年代には無数に塗り重ねられた点描で画面を敷き詰めるような作品を制作していたが、1976年頃からは布と糸を用いた「縫い」の作品制作へと移行する。1989年兵庫県近代美術館（現・兵庫県立美術館）「幻の山村コレクション」、1997年ニュージャージー州立モンクレ大学「ザ・コンテンポラリーステッチ・ジャパン・スタイル3人展」への出品、2012年BBプラザ美術館「卒寿を超えて「上前智祐の自画道」」が開催される。2018年、死去。享年97歳。

宇佐美圭司 USAMI Keiji

1940（昭和15）-2012（平成24）年

大阪府吹田市に生まれる。1958年大阪府立天王寺高校卒業の翌年に上京し、制作活動にはいる。1963年南画廊で初めての個展。翌年から、均質化されつつあった画面に人体の部分が現れ始める。この頃の作品が《レイチェル》である。また1965年には4つの人型「投石する人」「走る人」「たじろぐ人」「かがみこむ人」を黒人暴動の写真から抽出し、以後晩年までその「人型」を独自の展開のもとに画布に描き続ける。1983年美術文化振興協会賞、1989年日本芸術大賞受賞。1992年セゾン美術館等で回顧展開催。2001年三鷹市美術ギャラリーほか「宇佐美圭司・絵画宇宙展」、2007年池田20世紀美術館、2012年大岡信ことば館にて個展開催。2012年死去。享年72歳。2016年和歌山県近代美術館にて「宇佐美圭司回顧展 絵画のロゴス」、2021年東京大学駒場博物館「宇佐美圭司 よみがえる画家」が開催される。

宇留河泰呂 URUGAWA Yasuro

1901（明治34）-1986（昭和61）年 本名：宮崎 辰親

東京都生まれ。本名を宮崎辰親といい、パン・ウルガワの名前でも活動を行う。洋画家・デザイナー・舞踏家・書家として活動。慶應義塾大学仏文科を中退し、画業を独学で学ぶ。大正期の新興美術運動に関わり1926年映画・演劇など異なるジャンルの作家が集った単位三科を結成し、第1回目の展覧会を開催する。1927年上海に滞在し、上海芸術大学で油彩の講師を勤める。上海では、在上海日文化人の拠点となっていた内山書店で活動していた文芸漫談会の常連となり、魯迅をはじめとした文化人との交流を築く。東南アジア・インド・エジプト・イタリアを巡り、フランスへ渡る。マルセイユで日本人画家として初の個展を開催、サロン・ドートンヌで入選を果たす。その後、パリでデザイナーとして出発をし、1937年に帰国。1953年第1回日本宣伝美術会賞受賞。親交の深かった金子光晴の本の装丁デザインなど商業美術全般にわたる仕事をこなすかわら、油彩やガラス絵の個展を開催する。日本美術家連盟会員。